「認知症疾患医療センターにおける地域啓発活動の取り組み」

宮城県認知症疾患医療センター（三峰病院）
遠　藤　　眞

三峰病院の認知症疾患医療センターは宮城県での指定では初めてとなる認知症専門医療機関です。平成23年６月１日に指定を受け，東日本大震災と共に歩み，11年を迎えます。高齢化率の高い気仙沼地域に開設できたことは，高齢化社会において果たすべき使命は大きいと感じています。

認知症疾患医療センターには主に２つの機能があります。まずは認知症に関する相談，鑑別診断・治療・ケア方針の決定，患者や家族に必要な情報提供，地域包括支援センター等の関係機関との連携等の専門医療機関としての機能です。次に，医療連携会議や研修の開催，認知症に関する情報発信と啓発，人材育成等の地域連携としての機能です。

今回は後者の地域連携機能のひとつである認知症啓発において，私たち相談員が理念をもって地域に伝え続けている「認知症の考え方」について少し紹介したいと思います。

認知症という状態は「通常の脳や精神・身体の加齢に伴って起きる老化現象と連続性がある」と言われています。つまり超高齢社会において「誰もが加齢ともに経験するかもしれない状態」であり，長寿になればなるほど必然的に起こってくる状態を指します。

今も昔も長生きすることを家族や周囲は祝福し，もっと長生きしてほしいと願うことでしょう。

しかし，長寿に伴って起きる認知症は祝福せず，「困ったことだ」「何とか治したい」と捉え，克服すべき課題として問題視してしまうのはなぜでしょうか。また，長寿に伴って起きる介護についても「避けたい苦労」「迷惑をかける」として考えがちですが，やはり高齢化社会を生きるうえでは，介護も“誰もが経験していく当然の出来事”として捉えていくべきではないでしょうか。

これからの日本は「認知症に備え，向き合い，そして地域で共に暮らしてく時代」と言われており，避けられない現実であるにも関わらず，未だ認知症に対する偏見・誤解が根強い状況にあります。

おそらく認知症も介護も「老い」というネガティブなイメージが深く関係しているからでしょう。高齢になっていく，身体機能が衰えていく…その変化に不安な気持ちを抱くことは想像でき，仕方がないことですが，できるならば考えたくはないことで，目を背けたいことです。それ故に私たちは老いていくことが，どのような意味を持つのかを考えないようにしてきたのではないでしょうか。

痴呆と呼ばれた時代から認知症へと名称が変わっても未だ偏見・誤解をなくせないのは，「老い」に対して偏見を持ち続けているからではないかと思うのです。老いは平等にやってきますし，避けようがない現実です。そこに偏見をもっても意味がありません。

だからこそ私たちは認知症医療やケアの専門機関の機能を最大限活かして，「認知症や老いへの向き合い方」「早期備え，早期受容」という考え方を地域に啓発してきました。

この２年間はコロナ禍の影響もあり積極的な地域活動ができず，これまで培ってきた人と人との繋がりを保てなくなったことに葛藤していましたが，少しずつ地域の活力が戻ってきたことを実感し安堵しています。

再び当センターの総力を挙げて認知症医療やケアの向上に努めたいと思います。そして気仙沼で生きる人たちが認知症になっても地域の活力を生み出す存在であり続けるような，そして，家族は介護により孤立せず心身共に安定した生活が送れるような「福祉のまち」を目指したいと思っています。